國學院大學学術情報リポジトリ

ヴィクトリア・パブリックスクールと横浜のイギリス人居留民

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-23 キーワード (Ja): ヴィクトリア・パブリックスクール, 横浜居留地, イギリス人居留民, ユーラシアン, 外国人学校 キーワード (En): 作成者: 一海, 昇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001678

論　　文　　要　　旨

学籍番号	223312	氏　名	一海　昇

論　文　題　目：
ヴィクトリア・パブリックスクールと横浜のイギリス人居留民

（内容の要旨）

1880 年代横浜居留地の欧米人社会は、主に中小規模の商社や個人商店の経営者、従業員から構成されていた。開港当初は独身者が多かったが、この頃には横浜に仕事の基盤と家庭を築くようになり、居留民第二世代の子供が増えてくる。このことが横浜居留地における欧米人子弟を対象とする中等教育機関の設立の背景であった。

1887 年のヴィクトリア女王のジュビリーを契機に、イギリス人により日本初の欧米人子弟向け中等教育機関ヴィクトリア・パブリックスクールが横浜居留地に設立された。生徒の多くは横浜のイギリス人居留民の子弟であったが、学校は「国籍、人種、信教の区別なく、英語を話すすべての子供たち」を受け入れた。この対応は横浜居留地が本質的に多国籍なコミュニティであることを踏まえたものであった。

同じイギリス人であっても公共心や体面を重視する東京の上層中流階級層の人々とは異なり、中層中流階級層である横浜の居留民たちの価値観は経済合理性を重視するものであった。母国を遠く離れた場所で自らの才覚を頼りに競争の中で地歩を築いてきた彼等は、子供達にも自身と同じく商人として成功することを望んでいた。

彼等が中等教育機関を設立した理由は、本国との教育格差を解消し、子供に社会に出て役に立つ実学を学ばせるためであった。それ故、競合校ができた際には「イギリス人コミュニティ」の体面や威信を守るためにヴィクトリア・パブリックスクールを存続させることよりも、経済合理性を優先させて学校を選択した。また日本人やユーラシアンと一定の距離を置くことが彼等にとって暗黙の社会規範であり、そのためユーラシアン子弟を忌避して子供をヴィクトリア・パブリックスクールに行かせないものも少なくなかった。このような彼等の選択がヴィクトリア・パブリックスクールの生徒数減少、ひいては財政破綻による閉校を招いたのである。

ヴィクトリア・パブリックスクールの開校から閉校に至る経緯は、イギリス人の上層中流階級層の人々が意識していた、ナショナル・アイデンティティで結束した「イギリス人コミュニティ」が、横浜居留地の中層中流階級のイギリス人居留民にとって強い帰属意識を伴うものではなかったこと、そして彼等が横浜の欧米人コミュニティの一員という「ローカル」なアイデンティティを持ち、多国籍な横浜居留地に根ざした、合理性を重んじる価値観に基づいて生活していたことを示している。

キーワード（5 語）
ヴィクトリア・パブリックスクール、横浜居留地、イギリス人居留民、ユーラシアン、外国人学校